

2022年4月25日

2021年度 第三者評価を受けて（語り支える会の立場から）

北星学園大学附属高等学校
教育を語り支える会
事務局長 鶴田恵子

はじめに

コロナ禍の中で、2021年も終えてしまいました。PTAや後援会総会も書面開催となり、学校祭や体育大会、修学旅行は運営する教員、生徒の努力と工夫によって形を変えて開催することができました。昨年に続き、学校は制約があり窮屈な中でもできることを模索し、「教育」を継続されました。教職員の皆様のご苦勞と努力に、頭を垂れるばかりです。何より、逆境にあっても果敢に前を向いて、現状を受け止めて歩もうとしている生徒の皆様へ大きな拍手を送りたいと思います。

第三者評価を受けて

1. 本組織は主として北星学園大学附属高校の教育の充実に貢献するために、卒業生の保護者OB、OGキリスト教会関係者、退職教員、近隣住民、施設職員などによって組織されています。この度、第三者評価を受けて、北星学園大学附属高校が大切にしてきた「共育」（生徒も保護者も教職員も、共に育む、育つ）という視点から述べさせていただきます。
2. 昨年も述べましたが、本組織のメンバーはアナログの世代であるため、「ICT教育の推進」は、これほど必要性に迫られるとは考えていませんでした。
しかし、北星学園大学附属高校は、5年程前からICT教育の設備投資に力を入れ、2019年度からタブレットPC（Microsoft製）を全生徒へリース配布し、各教室に大型モニターを設置、通信環境インフラも含めて、ICT環境整備を行ってきました。文科省のGIGAスクール構想を意識していたことにより、理解が追いつきました。学校長をはじめ「ICT教育推進委員会」が、率先して研修や情報収集を行い、推し進めてきたことは、間違いではなかったと評価されていると考えます。この動きは、中等教育3校、高等教育1校をもつ学校法人北星学園全体の中で、一番進んでいたことを考えますと、附属高校に先見の目があったと言えることと同時に、本州では当たり前のように取り組まれていた新しい取り組みに対して、保守的である北星学園の体質が長所となる一方で、弱点ともなり得ることを検討していく必要性を感じます。
3. 新入生を対象とした「アンケート」から「本校に期待する点は何か」という調査を行い分析してこられましたが、第三者が評価するように、未知のコロナ禍においては、臨機応変に対応しなければなりません。現在の学校運営体制では、決定するプロセスが多く時間がかかっています。公選制度の管理職であるため、決定権の権限を委譲して、その決断を尊重してスピード感をもって前に進まなければならないこともあると思います。信頼に足りうる管理職であるため、教職員の意思と大きく相違する決断はないでしょう。そうした中で柔軟、かつスムーズに新たな取り組みに挑戦されることが期待されていると思います。
4. 英語の少人数展開授業の実施などを通して、英語力の向上に力を入れていることが第三者評価からも分かります。またICT教育への期待が上昇してきていることは、他校と比べて進んだ取り組み

みとなっていること分かります。スクールバスの導入は、利用者が多くなってきていることから、ニーズが高まってきていると感じます。費用対効果も視野に入れながら運用を考えながら、生徒にとってより良い形を検討して頂きたいと思います。

5. 第三者の指摘通り、コロナ禍で、計画していた様々なキャリア教育、体験型学習の変更を余儀なくされましたが、基本理念である「共育」を大切にしてくださいました。学校長が、コロナ禍で「自分達だけが安全であればよい」と考えるのではなく、他者や隣人との関りを意識していることを再三、述べられていました。「共育」という教育姿勢の表れであると感銘を受けました。一步、二歩、離れた立場から「教育を語り支える会」として、サポートしていきたいと思います。